

○ EUホーガン農業委員がTOKYO Xを視察、高い品質とコンセプトに感銘

G7農相会議への出席のために来日していたEUのフィル・ホーガン欧州委員(農業・農村開発担当)ら一行は22日、東京都内で東京のブランド豚「TOKYO X」の流通・販売関係者で組織するTOKYO Xアソシエーション(植村光一郎会長)との交流会に参加した。ホーガン委員をはじめイタリアなどEUの畜産関係代表者ら5人が参加、TOKYO Xの特徴やブランディングなどの説明を受け、その品質の高さとコンセプトに感銘を受けていたほか、農業者の高齢化など日本とEUで共通している問題・課題などについて意見を交わした=写真。



肉質改善に努めていること、スーパーマーケットトレードショーに120kgの肉豚の生体を展示して生産工程の優位性を消費者やバイヤーにアピールしてきたことなどが説明された。さらに一行は、立川市内のミートコンパニオンの直営レストランDANRAN亭

に移り、アソシエーションの植村会長がTOKYO Xのロース1本を持ち込み、現物を示しながら脂肪交雑、肉の色、肉のきめ締まり、脂肪の質などを説明、とくに肉質と脂肪の融点の低さが際立っていることを強調した。そのうえでホーガン委員らの目の前で手切りし、試食が振る舞われた。

今回の交流会は、G7農相会議への参加を機に日本の代表的な畜産物の生産現場を視察するために設けられたもの。当日は午前中に東京食肉市場を訪問した後、東京・立川市の(株)ミートコンパニオン本社でTOKYO Xについて説明を受けた。ここでは、TOKYO Xの4つの理念「safety」「biotics」「animal welfare」「quality」が解説されたほか、指定飼料はふすま10%、マメ科牧草2.5%など繊維質の多い設計になっていること、オレイン酸を高めるためにコメを15%添加されていることなどが紹介された。さらに、格付けでは肩肋骨の5～6本目を切開し、脂肪交雑、肉色、肉のきめ締まり、脂肪の質の4項目が満たされなければTOKYO Xとして出荷されないことや、生産者が自ら肉質検討会を行い

植村会長によると、試食でホーガン氏は、口に含んだ時の柔らかさと香りの良さから、TOKYO Xが牛肉に匹敵する価格で取引されている意味が納得できたと話していたという。植村氏は、交流会の大切さについて「今回、EUの指導者と交流ができて、色々な討議が行われた。世界的な農業者の高齢化だけでなく、可能性を広げる取組みとして人材力の強化やフードチェーン構築、女性・若者の活躍推進、農村コミュニティの活性化、持続可能な生産管理などがテーマとなり、日本と世界の農業環境を考える良い機会になった」と語っている。ホーガン氏からは、和牛とTOKYO Xの類い稀なる品質の良さとコンセプトの素晴らしさに、日本の明るい農業の未来が見えたと話していたという。

○ プリマハムが16年3月期通期予想を修正、売上高は増加も利益面で下方修正

プリマハムは25日、2016年3月期通期業績予想について修正した。売上高は3,610億円(前回予想3,470億円)、営業利益79億円(99億円)、経常利益87億円(100億円)、当期純利益64億円(66億円)と、売上高は予想を上回るものの、利益面では原材料費の高騰などで下方修正した。

売上高は、商品の拡販や得意先の新規・深耕開拓により、食肉、ハムソー、加工食品と

も堅調に推移し前回予想を上回る見込み。

利益面では、原材料費の高騰や包装資材・ユーティリティコスト上昇などの厳しい環境のもと、生産性向上によるコスト削減、販売管理費の抑制を進めたが、食肉事業での国内相場の高騰、海外相場の乱高下などにより在庫調整に難航したことで、営業利益、経常利益は前年予想を下回る見込みとなった。